



それは晴天の北の空にやって来た。遠く遠く西の方角から、少しずつ少しずつその存在を辺りに知らしめながら、その核とも思える一塊の漆黒雲を先導するようにやって来た。先達の薄墨色の雲は日の光を徐々に抑えつつ、空全体を彼らの世界へと染めて行く。

自宅の仕事部屋でエッセイの執筆をしていた稲津摩莉子（いなずまりこ）は、屋外の微妙な空気の变化を察知したのか、ハッとして原稿用紙の上にペンを置くと、北側の高い窓辺へと足を運んだ。

「来たわ！」

それを確認すると、徐々に暗くなって来た仕事部屋のカーテンを閉め、暗い部屋が苦手な彼女は蛍光灯を煌々と点けた。それから彼女はソファーには座らず、カーペットの床に仰向けになると目を閉じ、屍のように全身の力を抜いた。そして最後に耳の全神経をそれに集中させた。

間もなくパラパラと雨音が聞こえて来た。その小さめの雨音に合わせて雷の音もゴロゴロと軽くなり始めた。

「嗚呼、プレリュードを聴いているようだわ……」

降り始めた僅かな雨に、歓喜の声を一斉に上げる蛙たち。

瞬間、無音になった。

「……」

自然界の動きが全て止まってしまったかのようだ。今し方鳴いていた蛙の存在さえも忘れてしまいそうなほどの静けさ。摩莉子は床の上で更に耳を澄ませ様子を伺った。

「……」

静寂はほんの一分程だっただろうか。再びパラパラと雨音の軽やかなリズムが聞こえて来た。そして次の瞬間、一打の大きな雷鳴が床から摩莉子の全身に伝わって響き渡った。

「嗚呼、なんという期待以上の劇的な登場なの！ オーケストラの演奏は、正に天の声を真似ているとしか思えないわ」

快感を覚える程の強烈な一打の雷鳴に、摩莉子の心は満たされて行く。

いよいよ第一楽章が始まった。

蛙たちも二度目の歓喜の声をひとしきり上げたあと、雨音と雷鳴の華麗なる協奏曲を摩莉子と同じように黙して聴き入っているようだ。

昨日の天気予報で今日は雷雨になると知り、心密かに待っていた摩莉子。ところが今朝目覚めると、空の青さが眩しいほどに晴天だったせいか、締め切り間近の原稿の執筆に集中して、雷雨のことは忘れかけていた。だから尚更、摩莉子の喜びは大きい。

「嗚呼、何故わたしはこんなにも雷が好きなのだろう……」

屍のように横たわっていた摩莉子の肉体に、再び息が吹き込まれようにゆっくりと胸元を上下させ、彼女は感嘆の言葉を吐き出した。

次第に強まる雨音と雷鳴の連続する掛け合いに、今、演奏はクライマックスを迎えていることを感じ取った摩莉子は、再生したかのように新たな気が満ちた肉体を床から起こし、愛しい人に会いに行く時と同じときめきを胸に、北の窓辺へと向った。

尊敬と敬慕。稲津摩莉子にとって自然現象に対するこの感情は、人間に対しては容易に感じることは出来ない。カーテンを少し開け、北の窓からジッと見上げる空の芸術的光景。彼女は胸の中に溢れる想いを抑えながら、天のそれに向かい、そっと打ち明けた。

「嗚呼、あなたは今、正に目の前に存在しているのに、その姿は一瞬の光となって天を駆けるのみ。その音はわたしの魂を震わせ、何かしらの勇気を得たと感じさせ、そしてわたしの全身は歓喜で満ち溢れるのです！」

高鳴る鼓動の感触を残さず心の深奥に記憶させながら、摩莉子は再び床に横たわり、天の奏でるオーケストラの音に癒されながら、一時間ほど浅い眠りに就いた。

摩莉子を起こしたのは、出版社からの電話だった。

「稲津さん、金山（かなやま）です。エッセイのほう、明日の入稿に間に合いますか？」

「はい。大丈夫です！」

「それは助かります。……稲津さん、何かありましたか？」

「え、何か？」

「いつもより、声に力がありますね。何か良い事でも？」

「ええ、とてもステキなことが……」

「それは良かったです。では、明日の午後3時にお伺いします」

「はい。では、明日の午後3時に」

電話の受話器を置くと、摩莉子は直ぐに仕事用の机を置いている南側のカーテンを開け、外を眺めた。雨に浄化された木々の緑が目映っている。優しげな日の光が再び差し込み、静寂に包まれている庭の景色が、既にオーケストラの演奏は終楽章まで終えていたことを伝えている。

摩莉子は少しだけ息を吸い込むと、胸の奥深くから今度はゆっくりと大きく吐き出した。それから再び机に向かうと、誰ともなしに念い（おもい）を伝えた。いや、相手はそれと共にやって来たあの存在なのは確かだった。

「今日、あなたに逢えた感動を、言葉に残しておきたいと思います」

ペンを握った摩莉子は、机の上の原稿用紙を新しいものに置き換えると、タイトルを書いた。

『ライライ（雷来）』 了